

タイトル:平成 25(2013)年度 教育セミナー

日時:平成 25 年 9 月 20 日(金)~23 日(月・祝)

場所:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究 3 階 マルチメディア会議室(304)

「フランスにおけるイスラーム受容—ストラスブールの事例から」

佐藤 香寿実 (お茶の水女子大学大学院)

私は今回、イスラーム研究者との交流が少ないことへの危機感からこのセミナーへの参加を決めた。フランスにフィールドを持ち、中東・イスラーム社会の知識に乏しい私にとってはある意味「アウェイ」な場であったが、ヨーロッパ研究者にも門戸を開く本セミナーの懐の深さゆえに、心地のよい「アウェイ」を感じることができた。イスラーム研究に関する学びの場としてはもちろん、歴史学、人類学から教育学まで様々な学問にたずさわる研究者が「中東☆イスラーム」という共通のテーマのもとに集う、学問分野間の交流の機会としても有益であった。「イスラーム」という言葉の持つ可能性は、そのような空間的かつ分野横断的な広がりを持つことにあると思うが、同時に「イスラーム」に拘ることの限界についても改めて考えさせられた 4 日間だった。

また、最終日に発表させて頂いた身としては、前日までの講義や発表を聞くにつれ、「発表楽しみにしています」という有難いお言葉さえ大きなプレッシャーとなつてのしかかり、焦り苦しんだ 4 日間でもあったのだが、それも全ていい経験であった。セミナー後の飲み会では、先生方のフィールドに対する熱い思いを目の当たりにしたり、他の受講生の志の高さに触れたり、沢山の刺激を受け、自身の研究に対する姿勢を見直すきっかけとなった。

なかでもやはり、発表させて頂いたことは、自分にとって最も貴重な学びになったと思う。学外のアカデミックな場での発表としては初めての経験で、錚々たる先生方の前で稚拙な発表をしてしまったことが今となっては恥ずかしくもあるが、同時に大きな幸運に恵まれていたと実感している。焦点の絞り切れていない発表になってしまったこと、用語の使い方に配慮が足りなかったこと、質疑応答の際に答えに詰まってしまったことなど、反省点は挙げきれない。鋭い質問やコメントをくださった受講生の皆さまや、的確なアドバイスと手厚いフォローをくださった先生方には、感謝の一言に尽きる。発表後にも多くの方からコメントをいただいたり、黒木先生からは電話帳のように分厚い本を貸していただいたりと、温かいサポートに大いに感激した。後々、いただいた質問やコメントをじっくり再考することで、「開眼」したように感じることもあった。

さて、セミナーを終えて 1 ヶ月が経つが、この 1 ヶ月の間にも今回の学びが生きていると感じる機会は少なくなかった。学内の授業で床呂先生のグローバリゼーションズの三類型を思い出し、中間報告会では飯塚先生より教えていただいたマイノリティ法学に言及することができ、そして何より、自分のフィールド以外の地域に対する興味がぐんと広がった。今後もこの学びを活かし、今回得たつながりを大切にしていきたい。最後になったが、改めて、準備を進めてくださった AA 研の先生方、講師の先生方、事務局の千葉さま、関係者の皆さまにこの場でお礼を申し上げたい。本当にありがとうございました。